

ミスタートツドの話

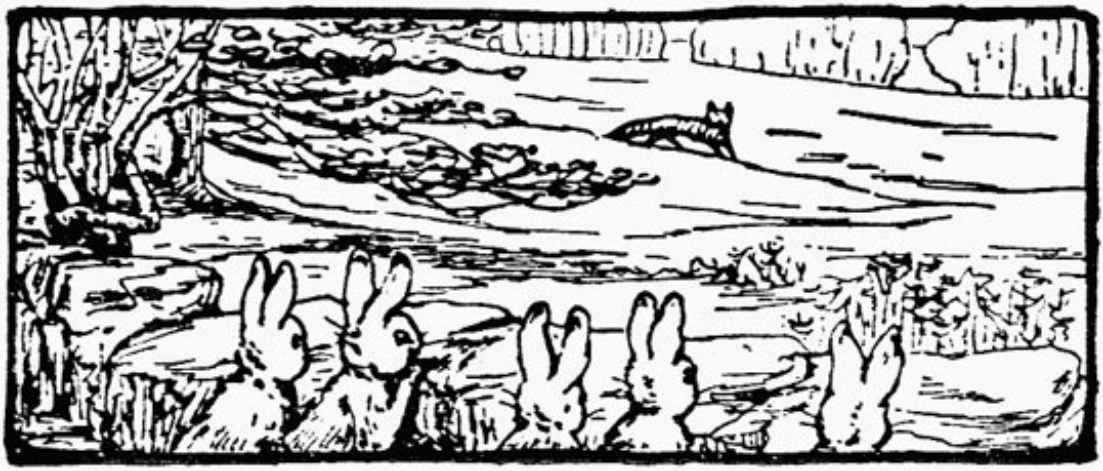


ビアトリクス・ポター さく・え

たちばな こうじ やく



ウルヴァ島のフランシス・ウィリアムへ
ーいつか！



筆者はこれまで、品行方正な登場人物たちの著作を、数多く物してきた。そこで今回は趣向を変え、二匹の不快な連中について物語ろうと思う。アナグマのトミー・ブロックと、狐のミスタートッドだ。

ミスタートッドを「いいやつだ」などと言うものは一人もいない。うさぎたちはやつを毛嫌いしていて、半マイルも先からその臭いを嗅ぎつけてしまう。

トッドには徘徊癖があり、狡猾そうなひげをたくわえ、神出鬼没だった。



ある時は、雑木林のなかの小枝で組んだ家に住みついて、野兎のベンジャミン・バウンサー翁の一家をおびやかし、次の日には、湖のそばの枝を刈り取った柳の木に移って、野ガモやビーバーたちをおののかせた。

冬から春先にかけては、たいてい挽き割り麦岳オートミールクラッグのふもとの雄牛ヶ丘ブルバンクスのてっぺんにある、岩場のねぐらで過ごしていた。

トッドには半ダースもの住まいがあったが、家に居つくことはめったになかった。

ミスタートッドがよそに移っている間も、彼の住まいは常に空家というわけではなかった。なぜかと言えば、時おりトミー・ブロックが引っ越してきていたからだ（許し

も請わずに)。



アナグマのトミーは肥満短軀に剛毛を生やし、よたよたと歩き回る、笑ったような顔つきの男だった。顔の大半が歯をむき出した口で占められているのだ。

暮らしぶりはあまり上品とはいえない。ジガバチの巣やカエルやミミズを食べ、月明かりの下をよろぼい歩いては、そこらを掘りかえすのだった。

着ている服はたいそう汚れており、寝るのは日中だが、いつも靴をはいたままベッドに入った。そして眠りにつくそのベッドは、たいていの場合ミスタートッドのだった。



ところでトミー・ブロックは、時に兎肉のパイを食べることがある。ただそれはごくごく若い兎の肉だけで、ほかの食べ物がまったく手に入らない場合に限られてはいた。

彼は兎のバウンサー翁とは仲が良かった。二匹は、性悪のカワウソどもやミスタートッドがいけ好かないという点で意見の一致を見ており、たびたび連中の悪口を言い合っていたのだ。





バウンサー翁はいくぶん耄碌気味で、巣穴の外で春の日ざしをあび、襟巻きを巻いて、パイプでうさぎたばこをふかしながら過ごしていた。

彼は息子のベンジャミンと、嫁のフロプシー、そして息子夫婦の間に生まれた孫たちと一緒に暮らしていた。その日の午後は、彼が孫たちの面倒を見ることになっていた。ベンジャミンとフロプシーが出かけていたからだ。



小さな赤ん坊うさぎたちは、ようやく青い眼を開けて、足をばたつかせるようになったばかりで、普段使っている兎穴から分かれた浅い穴の中にある、兎の毛と干し草でできたふわふわのベッドに寝かされていた。

実をいうと— バウンサー翁は、孫たちのことを失念していた。



バウンサー翁がひなたぼっこをしていると、森の方からトミー・ブロックが、サックと穴掘り用の小さなスパッドとモグラ取りの罠を持って通りかかった。肝胆相照らす二匹は、そこで立ち話をはじめた。

トミーは、キジの卵がまるで見つからないと愚痴をこぼし、ミスタートッドが横取りしているのだといってなじった。しかも、冬眠している間に、カワウソがカエルを食べ尽くしてしまっていた――

「おら二週間てもの、まともな飯にありつけてねえ、^{ピグナッツ}豚の餌で食いつないどるだよ。これじゃ菜食主義になっちまうか、自分の尾っぽでも食うよりほかねえだ！」と、トミー・ブロックは言った。

それは大して上手い冗談でもなかったが、バウンサー翁は愉快に感じた。トミーはあいかかわらず太ってずんぐりしていて、歯をむき出したにたにた顔をしていたからだ。

そこでバウンサー翁は笑い、中に入って種入^{シード}りケーキを食べていくよう熱心に勧めた。

「嫁のフロプシーが作ったカウスリップ・ワインも一杯どうかね」

トミーはいそいそと兎穴にもぐりこんだ。



お茶のあとで、バウンサー翁はパイプをもう一服し、トミー・ブロックにはキャベツの葉でできた葉巻をあげた。それはたいそう強いたばこで、トミーはいっそうにたにたと歯をむき出した。

巣穴はたばこの煙でいっぱいになり、バウンサー翁は咳き込みながら笑った。トミー・ブロックも、たばこをふかしながらにたにたした。

またバウンサー翁は笑い、咳き込み、キャベツの煙がしみて、目を閉じた。...

フロプシーとベンジャミンが戻ってきて――バウンサー翁が目覚ますと、トミー・

ブロックと小さな孫たちが一匹残らず消え失せているではないか！

バウンサー翁は、兎穴に誰かを入れたことを白状しなかった。だがアナグマの臭いが隠しようもなくぷんぷんしていたし、太った丸い足跡が砂の上に残されていた。バウンサー翁の失態はあきらかで、フロプシーは悲嘆に暮れて耳をもみしぼり、舅をひっぱたいた。



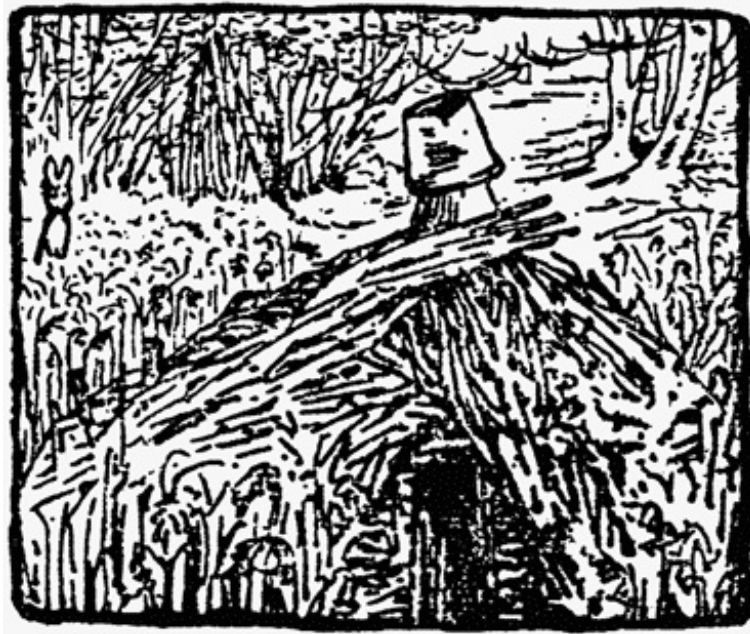


ベンジャミンバニーはすぐさまトミー・ブロックの後を追った。

追跡はさほど難しくなかった。トミーは足跡を残し、森の中の曲がりくねった小道をのんびり進んでいたのだ。こちらでコケやカタバミを引きぬいたと思えば、向こうでは毒麦をとるのに目立って深い穴を掘ったり、モグラ取りをしかけたりという具合に。

細い小川が道を横切っているところでは、ベンジャミンは足を濡らさず軽々と飛び越えたが、アナグマの深い足跡は、泥の中にくっきり残されていた。

小道は、伐採された雑木林の一角に続いていた。葉を茂らせたオークの切り株が点在し、青いヒヤシンスが咲き乱れている――ところが、あるにおいがベンジャミンの足を止めさせた。花のにおいではない！



目の前に、ミスタートッドの小枝の家があった。そして今日にかぎって、トッドは家にいた。狐のにおいがそれを証しだてるばかりでなく――煙突がわりの壊れたバケツから、煙がたちのぼっていた。

ベンジャミンバニーは目を見開いて立ちつくし、ひげをひくつかせた。枝の家の中で、だれかが皿を落とし、悪態をついた。ベンジャミンは地を蹴って、一目散に駆け去った。

そのまま止まらずに森の反対側まで走った。

どうやらトミー・ブロックも同じ道を引き返したらしい。石垣の上に、またアナグマの足跡があり、サックからほつれた糸くずが何本か、いばらにひっかかっている。

ベンジャミンは石垣を乗り越えて牧草地に入りこみ、またひとつ、仕掛けられたばかりのモグラ取りを見つけた。まだトミー・ブロックを見失ってはいない。

もう午後遅い時刻で、他のうさぎたちが夕暮れのそぞろ歩きを楽しんでいた。中に

一匹、青い上着を着たのがいて、せっせとタンポポを摘んでいる ー

「いとこのピーターだ！ おいピーター、ピーターラビット！」 ベンジャミンバニーは叫んだ。

青い上着のうさぎは、身を起こして耳を立てた ー



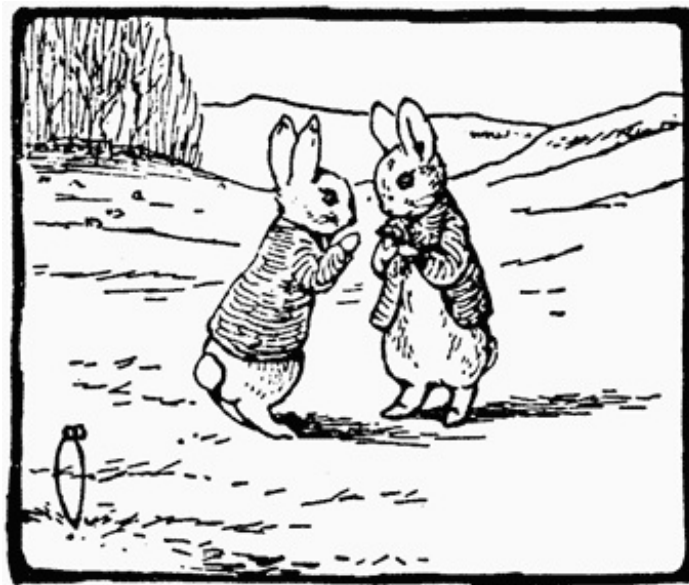


「いとこのベンジャミンじゃないか、どうしたんだ？ 猫か？ それともオコジョ・ケナガイタチのジョンのやつか？」

「違う違う違う！ あいつがおれの子をさらったんだ—— トミー・ブロックだ—— サックに入れて—— やつを見たか？」

「トミー・ブロックに？ 何匹やられた？」

「七匹だピーター、みんな双子さ！ やつはこっちに来たか？ 教えてくれ早く！」



「来たよ、来たとも、10分もたってない．．． あいつ、袋の中身はイモムシだって言ったんだ。イモムシにしては動きが激しすぎると思ったよ」

「どっちだ？ どの道を行ったんだ、ピーター？」

「あいつが何か生き物を入れたサックを持って、モグラ取りを仕掛けるところは見ていたよ。なあベンジャミン、僕も知恵を貸すから、はじめから話してくれないか」

ベンジャミンは事の次第を語った。

「バウンサーおじさんときたら、年甲斐もなく無分別なまねをしたものだね」

ピーターは思慮深げに言った。

「でも、希望の持てる要素が二つある。君の子どもたちは元気にもがいていた。そしてトミー・ブロックはケーキを食べて腹ぺこじゃなくなってる。やつはおそらく一眠りして、子どもたちは朝ごはんにとっておくだろう」

「どっち行ったんだ？」

「落ち着いたまえよ、いとこどの。どっちに行ったか僕にはよくわかってるんだ。ミスタートッドが小枝の家にいるなら、やつの行き先はブルバンクスのてっぺんにある方の家さ。もうひとつ付け加えると、あいつは僕に、姉妹のコットンテールに何かことづてはないかって訊いたんだ。そばを通るだろうからってね」 （コットンテールは黒ウサギと結婚し、丘で暮らしている）



ピーターは集めたタンポポをしまっておき、子どもを案じるあまり浮き足立っている父親に同行することにした。

彼らはいくつもの原っぱを越え、丘を登りはじめた。トミー・ブロックのはっきりした痕跡を追って。どうやら12ヤードごとに、サックをおろして休憩しているようだ。

「やっこさんだいぶ息切れしてるにちがいない。近づいてるのが臭いでわかるよ。なんてくさいやつだろう！」 とピーターが言った。





日差しは傾きつつあったが、まだあたたかく、丘の牧草地を照らしていた。中腹のあたりで、家の門口に座っているコットンテールに会った。そばで4、5匹の育ちざかりの子うさぎたちが跳ね回っている。一匹だけ黒くて、他は茶色い。

コットンテールは、トミー・ブロックが離れたところを通りすぎていくのを見かけていた。旦那は家にいるかいとたずねたが、彼女が答えたのは、トミーは自分が見ている間に二回も休憩していたということだった。

トミーは会釈して、サックを指さし、それから腹をかかえて笑ったらしかった——「いこうピーター、やつが子どもたちを料理しちまう、急ぐんだ！」と、ベンジャミンバニーは言った。

彼らはどンドン丘を登った——

「旦那のやつ、家にいたぜ。あいつの黒い耳が穴からのぞいてるのをおれは見た」

「あいつらは岩山の近くに住んでるんだからね、ご近所さんと揉めごとをおこしたくないのさ。来いよベンジャミン！」

ブルバックスの頂上の森に近づくにつれ、彼らの足取りは慎重になった。

積みあがった岩の間から木々が生い立つ岩山のふもと——そこにミスタートッドの家があった。急な斜面の上であり、岩や藪が上から覆いかぶさるようにはりだしている

。

うさぎたちは用心深く忍び寄り、耳を澄ましながら様子うかがった。





その家は、洞穴と、牢獄と、おんぼろ豚小屋の中間のような代物だった。頑丈なドアがついていて、しっかり戸締りされていた。

窓ガラスは夕日で赤く燃えていたが、台所には火の気がなかった。うさぎたちが窓からのぞき見たかぎりでは、暖炉にはかわいた薪がきちんと並んでいる。

ベンジャミンは安堵のため息をついた。



けれども台所のテーブルの上に用意されていたものは、彼を震えあがらせた。

青い柳模様をついた大きな空のパイ皿に、巨大な切り分けナイフとフォーク、それに肉切り包丁。テーブルのもう一方のはしには、半分広げられたテーブルクロスと、皿、タンブラー、ナイフとフォーク、塩入れ、からし、そして椅子が一脚――要するに、誰かさんの食事の支度が整えられていたのだ。



人気はなく、子うさぎは一匹も見えない。台所はがらんと静まりかえり、時計さえ止まっていた。ピーターとベンジャミンは窓ガラスに鼻を押しつけ、暗がりを見つめた。

それから岩場をはい登って、家の裏手へ回った。そこははじめじめして悪臭がただよい、茨やサンザシがはびこり放題だった。

うさぎたちは身震いした。

「可哀そうなおれの赤んぼたち！ 何てひどいところだ、おれはあの子らにもう二度と会える気がしないよ」

ベンジャミンは嘆いた。

彼らは寝室の窓に忍び寄った。台所と同じように、固く戸締りがされていたが、この窓には最近開けられた形跡があった。蜘蛛の巣が破られ、窓枠のうえに真新しい汚れた足跡がついている。

部屋の中は暗くて、はじめのうち何も見えなかった。が、物音は聞こえた――深くゆっくりと規則正しいいびきが。目が暗闇に慣れると、ミスタートッドのベッドで、誰かが毛布にくるまって寝ているのがわかった――

「あいつ靴を履いたままベッドに入ってる」

ピーターがささやいた。



ベンジャミンはうろたえ、ピーターを窓枠から引きはがした。

ミスタートッドのベッドからは、トミー・ブロックのうなるようないびきが整然と続いている。子どもたちの姿はない。

日は暮れはて、森でフクロウがホーホー鳴きはじめた。あたりには、墓に埋めた方がよさそうな、ありがたくない代物がたくさん散らばっていた。うさぎの骨だの、どくろだの、にわたりの脚だの、気味の悪いあれこれが。実にぞっとしない場所で、おまけに真っ暗だった。

彼らは家の正面に戻り、台所の窓のかけがねをはずそうと、あらゆる手をつくした。サッシの間から錆びたくぎで押し上げようとしてみたが、あかりもなしではとうてい無理な相談だった。



二匹は並んで窓の外にしゃがみ、聞き耳をたてながらぼそぼそと話し合っていた。

30分もすると、森の上に月がのぼった。冴えた冷たい月あかりが、岩間の家を皓々と照らし、台所の窓にも差し入った。だが悲しいかな、赤ん坊うさぎたちは影も形もない！

月光が、肉切りナイフやパイ皿を光らせ、汚れた床の上に光のすじを描いた。

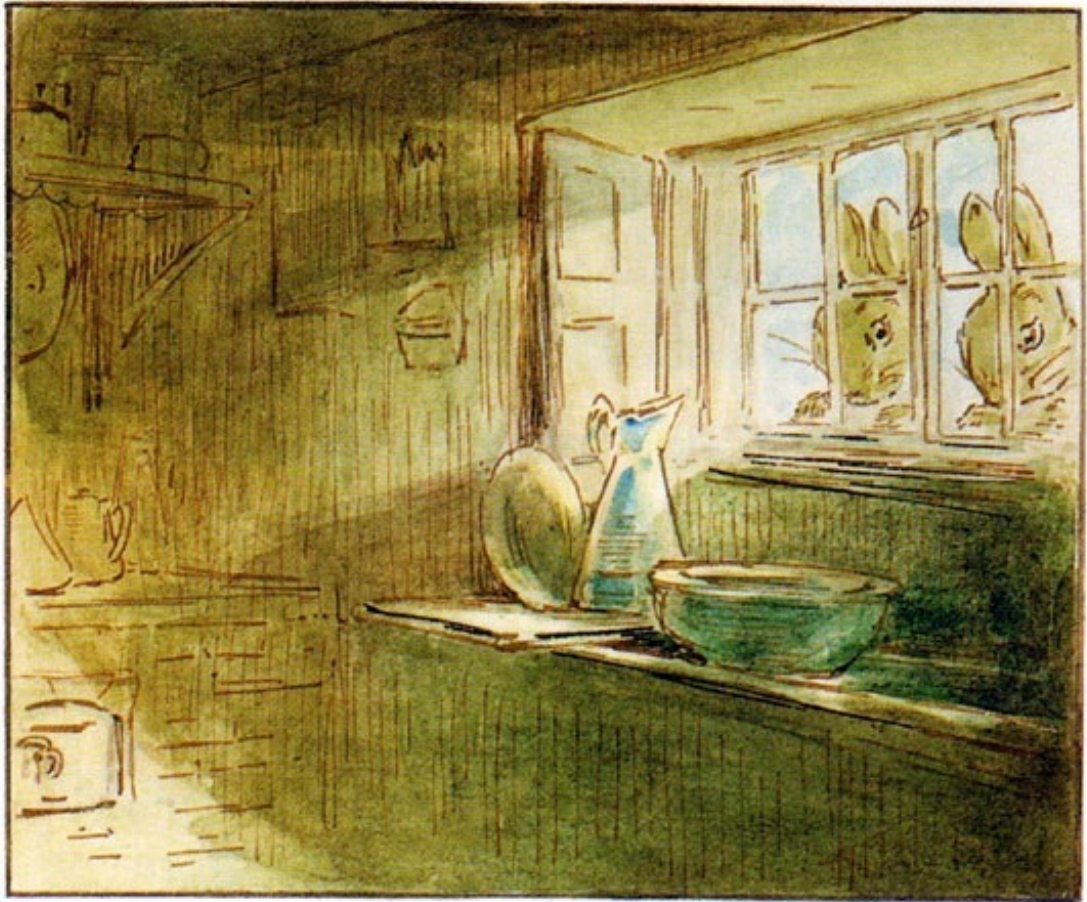




その光で、暖炉の横の小さなとびらが見えた —— 薪であたためる旧型の煉瓦のかまどについた、小さな鉄製のとびらだ。

やがて同時に、ピーターとベンジャミンは気づいた。彼らが窓をゆするたび —— その小さなとびらが、内側から応えるようにゆれるのだ。

子どもたちは生きたまま、かまどに閉じこめられている！



色めきたったベンジャミンの騒ぎ声で、トミー・ブロックが目を覚まさないのは幸いだった。トミーはミスタートッドのベッドで、厳かにいびきをかき続けていた。

しかし見つけたといっても、それで安心するわけにはいかない。窓は開かないし、子どもたちも生きてるとはいえ——はいはいすら満足にできない赤ん坊が、自力で脱出できるはずもないのだ。

ひとしきり耳打ちしあった末に、ピーターとベンジャミンはトンネルを掘ることに決め、斜面を1, 2ヤード下から掘り進めはじめた。うまくすれば家の下の大きな石を避けていけるだろうと思った。台所の床が土間なのか石敷きなのかは、汚れすぎていて判別できなかった。

彼らは数時間、掘りに掘った。石に邪魔されてまっすぐには掘れなかったが、それでも夜が明けるころには、台所の床下までたどりついた。ベンジャミンはあおむけになり、上に向かってガリガリ掘り続けた。

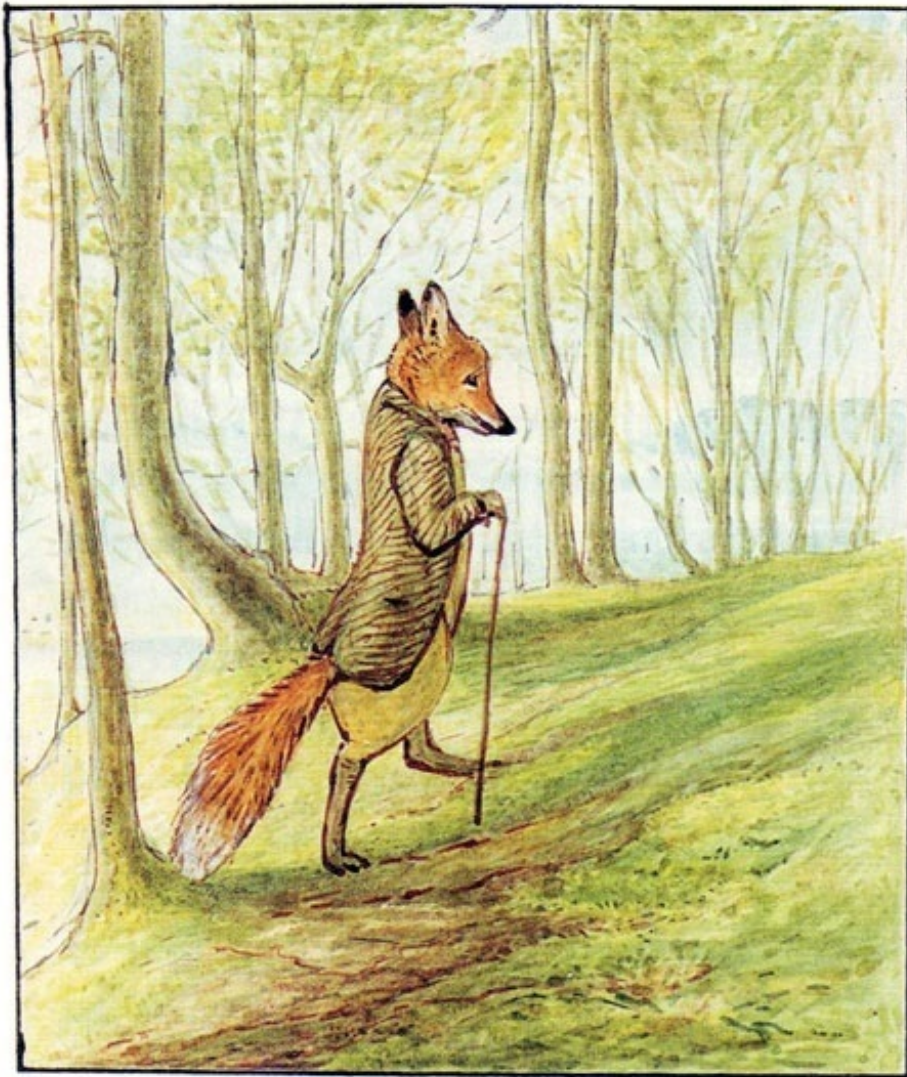
爪をいためたため、トンネルの外で砂を掻きだしていたピーターが、朝だと叫んだ——日がのぼり、ふもとの森でカケスが騒ぎ出していた。

ベンジャミンバニーは暗いトンネルから出てきて、耳から砂を払い落とし、足で顔を拭いた。丘を照らす太陽が、一瞬ごとにぬくもりを増していく。谷間には霧がたちこめ、その白い海の下から、黄金色に染まった木々の頂きが突き出していた。

再び霧の下から、カケスの怒ったような鳴き声があがった——そしてそれに続いて、すどく甲高い狐の吠声が聞こえたではないか！

二匹のうさぎたちは完全に度を失い、とれるかぎりにおいて最も愚かしい行動に出た。掘ったばかりの短いトンネルに駆け込み、どんづまりのトッドの台所の床下に身を隠したのだ。







ブルバックスをのぼってきたミスタートッドは、不機嫌の極みだった。

まず、皿が割れたことが腹立たしかった。それは彼自身の過失にすぎなかったのだが、その陶磁器の皿は、祖母のヴィクセン・トッド婆さまが遺してくれたディナーセットの最後一枚だったのだ。そのうえ小さい羽虫どもが、やたらとわいて鬱陶しかった。さらには雉の巣にいたメスの雉を獲り逃がし、五つだけあったタマゴのうち二つは腐っていた。

冴えない夜だった。



むしゃくしゃした時の常として、トッドは家移りすることに決め、枝を刈った柳の木に行ってみた。

けれどもそこは湿っぽく、近くにカワウソどもが魚の死骸を残していた。ミスタートッドは他人の食い残しなど我慢ならない。

それで丘の上をめざしたのだったが、紛れもないアナグマの痕跡を目にしては、気分がよくなるどころではなかった。こうまで野放図に苔を掘り散らかす輩は、トミー・ブロック以外にありえない。

ミスタートッドは杖で地面をひっぱたき、頭から湯気をたてた。トミーがどこへ向かったか察しがついたのだ。

癩に障るといえば、しつこく後をついてくるカケスも癩の種だった。カケスは木から木へと飛んでは騒ぎたて、声の届く範囲にいるうさぎたちに、猫か狐が丘を登ってくるぞと警告しているのだ。一度、けたたましく鳴きながら頭上に飛んできたとき――トッドはカケスにとびかかり、吠えたててやった。

彼は大きな錆びた鍵を手に、自分のねぐらにそろそろと近づいて行った。臭いをかぎ、ひげを逆立てて。

家の戸締りはされていたが、中に誰もいないかは疑わしいとトッドは思った。錆びた鍵が鍵穴で回る音が、床下にいるうさぎたちの耳にも届いた。トッドはそっとドアを開け、中に入っていった。



目に入った台所の光景は、ミスタートッドを激怒させた。トッドの椅子が、トッドのパイ皿が、ナイフとフォークが、からし、塩入れ、そして畳んで戸棚にしまっておいたテーブルクロスが――すべて夕食用に（もしくは朝食用に）準備済みだったのだ――あのにつくきトミー・ブロックが使うつもりだったに違いない。

あたりには掘り返した土と汚れたアナグマのにおいとが漂い、幸いにもうさぎのにおいはすっかりかき消されていた。

だがもとより、ミスタートッドの意識を捕らえていたのは、物音だった——深くゆっくりと規則正しい、いびきのような寝言のような音が、彼のベッドから聞こえてくる。

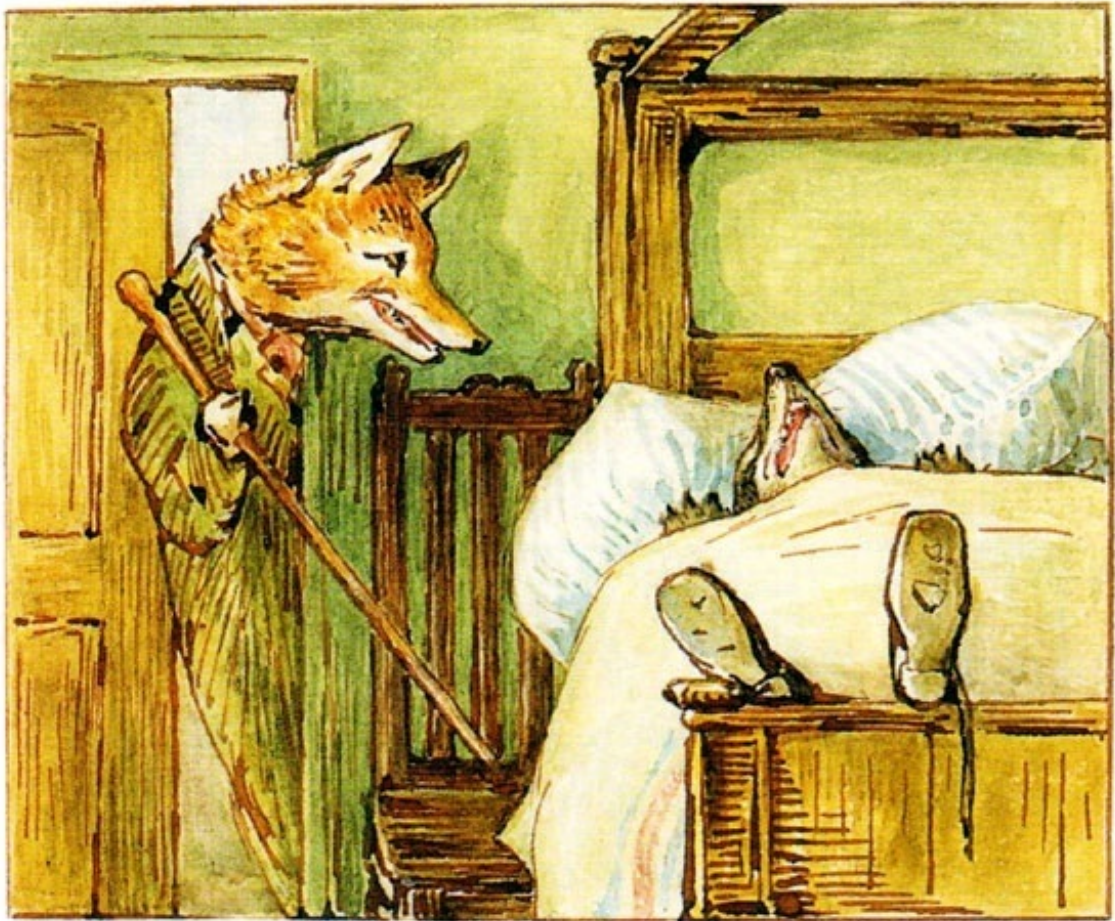
トッドは半開きの戸の蝶番の隙間から、寝室をのぞき見た。そして踵を返し、家から飛び出した。ひげは逆立ち、襟の毛は怒りで直立していた。



それから20分ほど、ミスタートッドは抜き足で家に忍び入っては、あわただしく撤退を繰り返した。次第に思いきって奥へ踏み込んでいき——寝室までたどりついた。家の外では足摺りして怒り狂ったものの、いざ中に入ると——トミー・ブロックの歯を正視する気になれないのだった。

トミーは仰向けで、耳まで裂けた口から歯をむき出し、安らかで規則正しいいびきをかいていた。しかし、片方の目は完全に閉じていなかった。

ミスタートッドは、寝室を出たり入ったりした。二度、散歩用の杖をたずさえて入り、一度は石炭バケツを持ってきたが、思い直してそれらはひっこめた。



トッドがバケツを片付けて戻ってくると、トミー・ブロックは少し横向きになっていた。それでも依然として、ぐっすり眠っている様子だった。トミーは救いがたいほど横着だったし、ミスタートッドなど恐くもなんともなかったし、また単純にあまりにけだるく、寝心地がよすぎて動きたくなかったのだ。

またしても寢室に舞い戻ったミスタートッドは、手に物干し綱を持っていた。彼はしばらくそこに立って、トミーの様子をうかがい、いびきに耳を傾けた。実にやかましいいびきだったが、わざとらしさは感じられなかった。

トッドはベッドに背を向け、窓のかけがねを外した。窓がギイと音をたててきしみ、トッドは跳ぶように振り向いた。トミー・ブロックは開けていた片目を――慌てて閉じ、いびきをかき続けた。



トッドが始めたのは、奇妙で、しかもかなり窮屈な作業だった。（何しろベッドが寢室の窓とドアの間にあっただけ）

窓をほんの少し開け、物干し綱のフックのついたはしの部分だけを手元に残して、残りを全部外に押し出した。そして、真面目にいびきをかきつづけるトミーをちょっとした間ながめると、また部屋から出て行った。

トミー・ブロックは両目を開け、物干し綱を見てにたにたした。窓の外から物音が聞こえてきたので、急いで目を閉じた。





ミスタートッドは玄関を出て、家の裏手に回った。ところがその途中で、兎穴につまづいた。中にいることに気づかれたが最後、うさぎたちはあっというまに引きずりだされていただろう。

トンネルに突っ込んだ足は、もう少しでピーターとベンジャミンの頭に触れるところだった。しかし幸いなことに、トッドはその穴もトミー・ブロックの仕業だと思いこんだ。

トッドは窓枠から物干し綱の束を取りあげ、しばらく耳を澄ましてから、綱を木に結びつけた。

片方の目で窓越しにそれを見たトミー・ブロックは、何のつもりだろうかと首をひねった。



ミスタートッドは、大きなバケツにいっぱい泉の水をくんできて、重さによるめきながら、台所から寝室に運びこんだ。

トミー・ブロックは小さく鼻を鳴らし、いびきに熱をこめた。

トッドはバケツをベッドの横におろし、フックのついた綱のはしを手にとった——ためらいがちに、トミー・ブロックの方をうかがいながら。トミーのいびきはほとんど卒中でも起こしたようだったが、むき出しの歯はだいぶ目につかなくなっていた。

ベッドの頭の方に置いた椅子に、ミスタートッドはひどくびくつきながらのぼった。危険極まりないトミーの歯が、足のすぐそばだったのだ。

トッドは手を伸ばし、フックのついた綱の先を、天蓋ベッドのカーテンを吊るす枠の上にかけて。

(ずっと空家だったため、カーテンはたたんでしまいこまれていた。ベッドカバーもかかっていなかったなので、トミーがくるまっているのは毛布だけだった)



ミスタートッドは不安定な椅子の上に立ったまま、トミーをしげしげと見下ろした。まったく賞でもくれてやりたいほどよく眠るやつだ！

これなら何があっても目を覚ましたりはすまい——いわんやベッドの上から紐が垂れ下がったくらいでは。

無事に椅子からおりたミスタートッドは、水の入ったバケツをもう一度持ち上げようとした。そいつをフックにかけて、トミー・ブロックの頭の上にぶら下げ、窓の外から紐で動かすシャワーのようなものを作るつもりだったのだ。



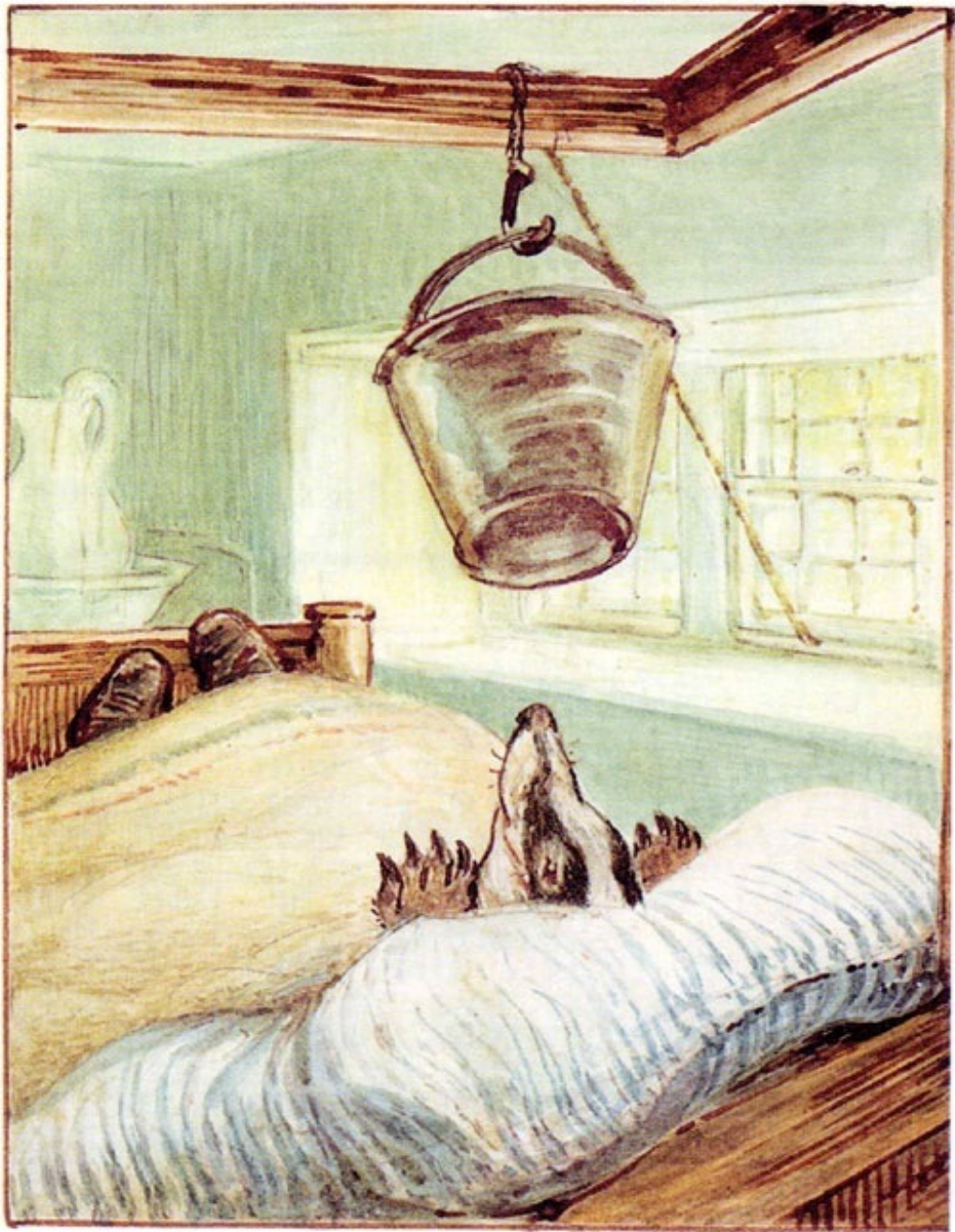
しかし生まれつきの細い足では（たとえ執念深さと薄茶の髭を持ち合わせていようと）——その重荷をフックの高さまで持ち上げることはとうてい不可能で、危うく平衡を失って倒れそうになる始末だった。

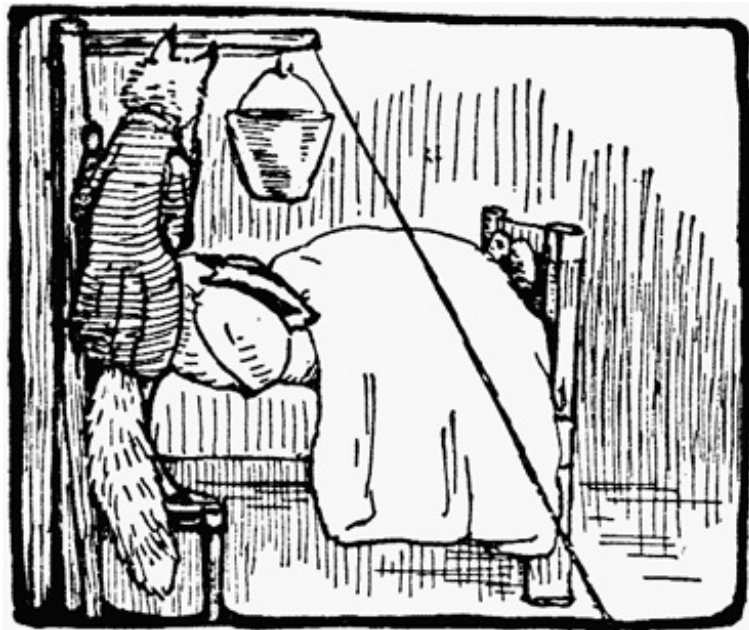
いびきはますます卒中的に高まった。トミーは片足を毛布の下でひくひく痙攣させながら、それでもまだ太平楽に寝こけていた。

何の収穫もないままバケツとともに椅子をおりたミスタートッドは、熟考の末、バケツの水を洗面器と水差しにあけた。これなら重すぎることはない。空のバケツはトミー・ブロックの頭上につり下げられ、ぶらぶらと揺れた。

こうまでされて寝ている人がいるだろうか！ トッドは椅子をのぼってはおり、おりてはのぼった。

バケツいっぱいの水をいっぺんに持ち上げることができなかったため、ミルク差しを使って、少しずつ汲み入れることにしたのだ。水が満たされるにつれてバケツは振り子のようによろめ、時おりぱしゃりとしぶきをあげた。それでもまだトミーは規則正しいいびきをかき、微動だにしない——片方の目をのぞいては。





とうとう準備がととのった。バケツは満杯、ぴんと張りつめたロープはベッドの上から窓枠を通過して、表の木につながっている。

「俺様の寝室はめちゃくちゃになっちまう」とトッドはつぶやいた。「だがどのみち春の大掃除くらいのことをしなけりゃ、あのベッドには二度と寝られやせんのだ」

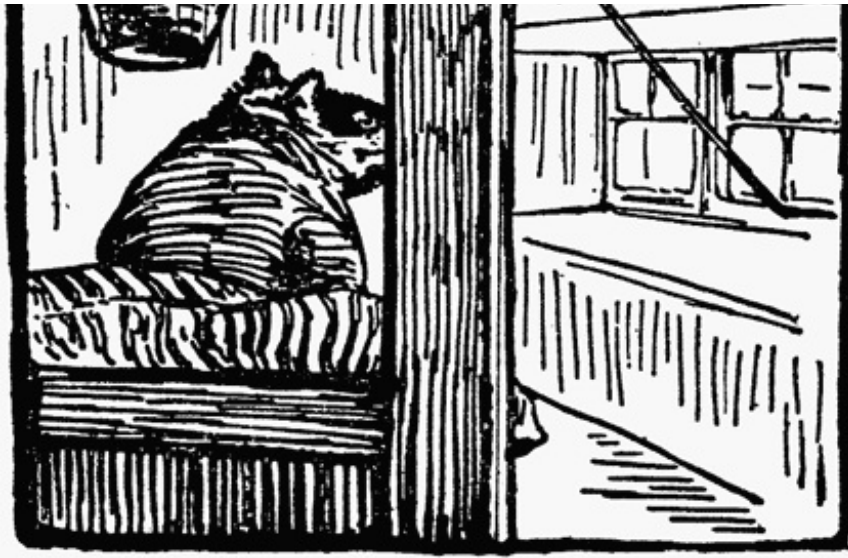


ミスタートッドは眠るアナグマに最後の一瞥をくれると、そっと部屋を抜けだし、表に出て玄関の戸を閉めた。トンネルの上を通る足音が、うさぎたちに聞こえた。

トッドは急ぎ家の裏手に回り、ロープをほどいてバケツの水をトミーに浴びせかけてやろうとした――

「やつめ、ぶったまげて飛び起きるがいい」とトッドは言った。





トッドがいなくなるやいなや、トミー・ブロックはベッドから飛び起きていた。トッドの寝間着を丸め、自分が寝ているような格好にして水入りバケツの真下に寝かせると、同じく部屋を出て行ったのだ——盛大ににやつきながら。

台所に行ったトミーは、暖炉の火をおこし、やかんで湯を沸かした。さしあたって、子うさぎたちを料理するのは、手間がかかるのでやめておいた。



さて、ミスタートッドが木のところに行ってみると、ロープはバケツの重みで張りきり、結び目が固くなりすぎてとてもほどけなくなっていた。

やむをえず、トッドはそれを歯で食いちぎりにかかり、20分以上も噛んだりかじったりした。

しまいにはロープは弾けるようにちぎれ、トッドは歯を引っこ抜かれそうになって、手ひどく後ろにはね飛ばされた。



家の中から、すさまじい破碎音と水音が響き、バケツの転げ回る音が聞こえた。だが叫び声がしない。

ミスタートッドはきつねにつままれたようになって、しばらく座り込んだまま、よくよく耳を澄ましていた。そして、窓から中をのぞいた。ベッドから水がしたたり、バケツが部屋の隅に転がっている。

ベッドの真ん中の毛布の下で、何かが濡れてぺしゃんこになっていた――バケツの当たった部分が（お腹のあたりだったが）こっぴどくへこんでいた。濡れ毛布に隠れたそいつの頭からは、いびきはもう聞こえてこなかった。

動く物はなく、何の音もなかった。マットレスから水滴がぽたりぽたりと垂れているほかは。



ミスタートッドは半時間ばかりその光景に見入っていた。目を濡れたように光らせて

それから陽気に跳ね回り、勢いづいて窓を叩きさえした。それでもベッドの上の固まりはぴくりともしない。

そうとも――もはや疑う余地はない――事は彼が計画した以上にうまく運んだのだ。あわれなおいぼれトミー・ブロックは、バケツに当たって死んだのだ！

「あのろくでなしは、やつの掘った穴に埋めちまおう。寝具一式は表に出して、お天道様で乾かそう」とミスタートッドは言った。

「テーブルクロスは洗って、草のうえに広げて日光消毒だ。それから毛布もつるして風に当てにゃならん。ベッドは徹底的に消毒して、あんかで乾かして、湯たんぽであたためてやらにゃ」



「ありとあらゆる石鹼がいるぞ、それから重曹と掃除用ブラシも、殺虫剤も、消臭用の石炭酸もだ。とにかく殺菌だ。ひよっとすると硫黄も燃した方がいいかもしれん」

彼は台所からシャベルを取ってこようと、大急ぎで家の表にまわり――

「まずはあの穴を広げて――それからやつを毛布にくるんで引きずり出して．．．」

と、ドアを開けると．．．

トミー・ブロックが、ミスタートッドの台所のテーブルにつき、トッドのティーポットから、トッドのカップにお茶を注いでいるところだった。これっぽっちも濡れてなどおらず、にたにたと笑って。

そしてカップの中のやけどするほど熱い紅茶を、そっくりトッドに浴びせかけた。



たちまちトッドはトミーに襲いかかり、トミーは瀬戸物の破片を踏み碎いてトッドに組みついた。

かくて台所にて恐るべき戦闘が勃発した。調度品が落ちて壊れ、そのたびに床が抜けそうなほどすさまじい音が、床下にいるうさぎたちの耳に響いた。

ピーターとベンジャミンはトンネルから這い出し、不安そうに耳を澄ませながら、これらの岩や茂みの間をうろうろと歩き回った。



家の中は大変な騒動だった。赤ん坊うさぎたちは目を覚まし、かまどの中でふるえおののいていた。いっそ閉じ込められていて幸いだったかもしれない。

テーブル以外のすべてのものがひっくり返し、炉棚と炉格子をのぞくすべてのものが壊され、瀬戸物は木っ端微塵にうち砕かれた。



椅子は壊れ、窓も壊れ、時計は派手な音を立てて床に落ち、トッドの茶色のほおひげがひきむしられて散らばった。

花びんは炉棚から落ち、蓋付き缶は棚から落ち、やかんは暖炉の横台から落ちた。トミーの片足はラズベリージャムのつぼにはまりこんでいた。

そしてやかんの熱湯が、トッドのしっぽにぶちまけられた。



落ちたやかんのおかげで優位にたったトミー・ブロックは、まだにたにた顔のまま、ミスタートッドを丸太のように転がして、ドアから表に突き出した。

そして家の外でも唸りあい噛みつきあい、しまいに岩にぶつかりあいながら、丘の斜面を転げ落ちていった。不倶戴天の敵同士とは、この二匹のことをいうのだろう。





邪魔者がいなくなるや、ピーターラビットとベンジャミンバニーが茂みから姿をあらわした――

「今だ！ 行けベンジャミン！ 行って子どもたちを助けるんだ！ 僕が戸口を見張ってやるから」

けれど怖じ気づくベンジャミン――

「いやいや！ やつら戻ってくるぞ！」

「来やしないよ」

「いや来るね！」

「縁起でもないこと言うなよ！ やつらならきつと石切り場まで落っこちてるさ」

それでも尻込みするベンジャミンを、ピーターが繰り返せつつ――

「早く、大丈夫だから。かまどの扉を閉めてこいよ、ベンジャミン、そうすりゃ子どもたちがいなくなっただって気づかれやしないって」

さながら活劇めいたやりとりが、ミスタートッドの台所で繰り広げられたのだった！

兎穴の家では、状況はきわめて緊迫していた。

言い争いながら夕食をすませたフロプシーとバウンサー翁は、眠れない一夜を過ごし、朝食の席で再び言い争った。

バウンサー翁もこの期に及んでは、兎穴に客を招き入れたことは認めざるをえなかったものの、フロプシーの問いかけや小言にはだんまりを決めこんでいた。一日が重苦しく過ぎていった。

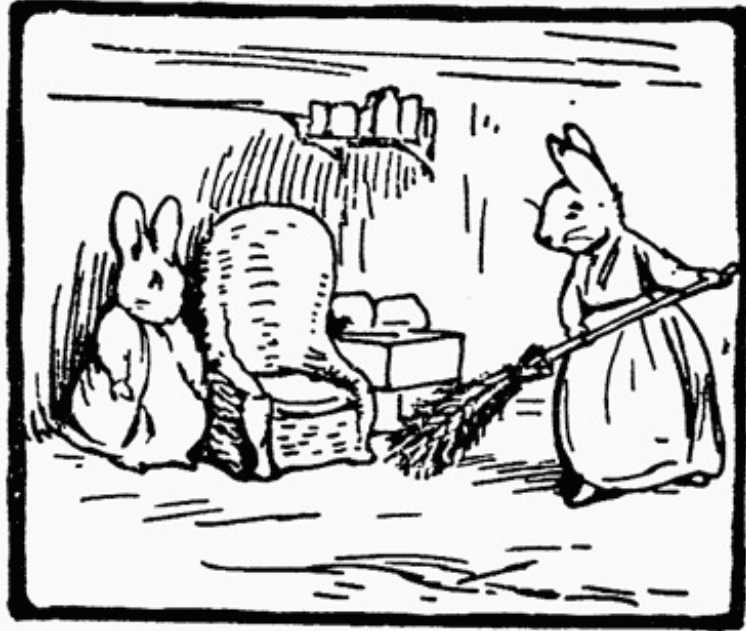


バウンサー翁はすっかりへそを曲げ、椅子を盾にして、部屋の隅っこでぢぢかまって

いた。

フロプシーは舅のパイプを取りあげ、煙草を隠してしまった。そして気持ちを落ち着けるために、家じゅうひっくり返して春の大掃除をはじめ、今しがたそれを終えたところだった。

バウンサー翁は椅子の後ろで、嫁が次に何を始めるかとあれこれ気をもんでいた。



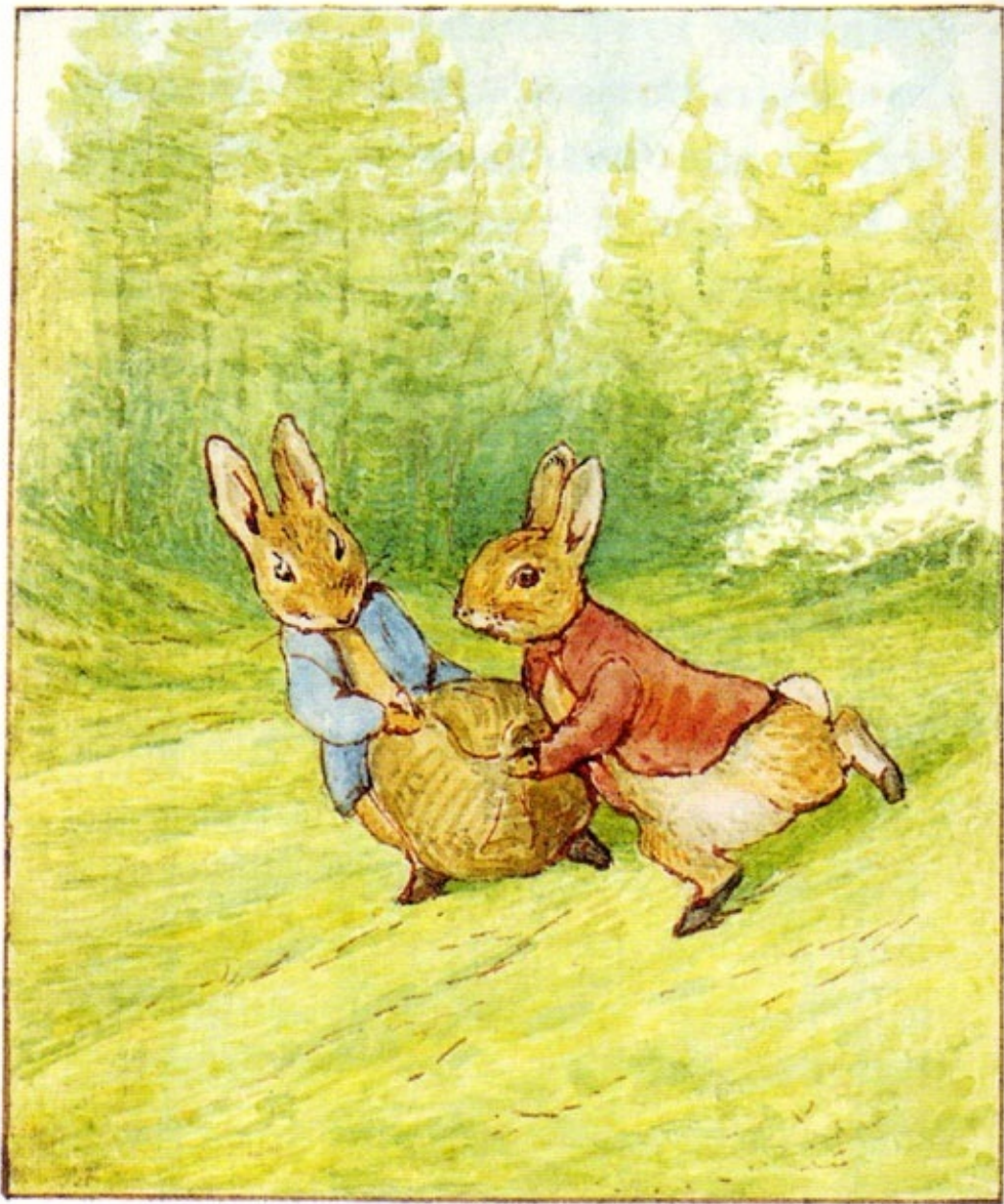
ミスタートッドの台所では、ベンジャミンバニーが散乱する壊れ物のあいだをぬって、雲のようにたちこめる埃をくぐり、足場を選びながらおっかなびっくりかまどに近づいていた。かまどの扉を開け、中をさぐると、何かあたたかい物がもぞもぞ動いている。彼はそっとそれを持ち出し、ピーターのところに戻った。

「子どもたちは取り返したぞ！ このまま逃げられるか？ なあピーター、隠れた方がいいか？」

ピーターは耳を立てた。森の方から、とっくみあう物音がまだかすかに聞こえてきた。

五分後には、二匹のうさぎたちは息を切らし、ブルバックスを大急ぎで駆け下っていた。両側から持ったサックを半ば引きずり、あちこち草のうえにぶついたりしながら。

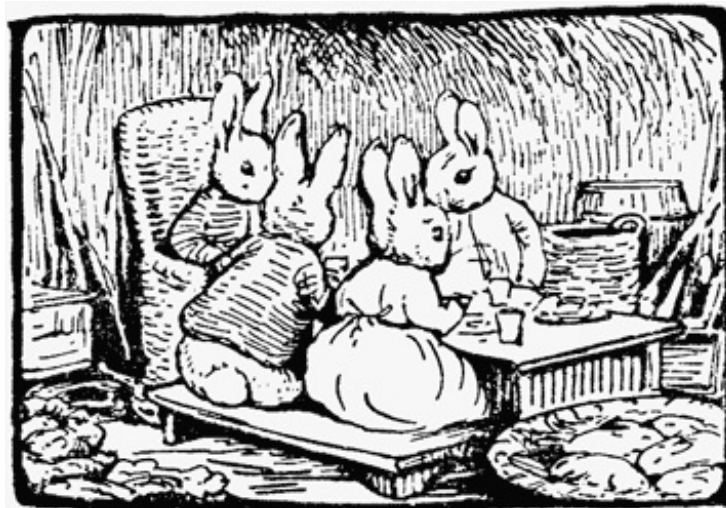
彼らは無事に家までたどりつき、兎穴に躍りこんだ。





ピーターとベンジャミンが子どもたちをつれ、意気揚々と帰還したときの、バウンサー翁の安堵とフロプシーの喜びよときたら大変なものだった。子どもたちはひどく目を回し、お腹をぺこぺこにへらしていたが、ミルクをもらってベッドに寝かされると、すぐに元気になった。

バウンサー翁には、新しい長煙管と封を切っていないうさぎたばこが贈られた。簡単に機嫌を直しては沽券に関わると思ってか、彼はしばらく手を出さずにいたが、結局は受け取った。



バウンサー翁の失態が水に流されたところで、みんなそろっての夕食となった。

そこでピーターとベンジャミンは、一部始終を物語のように話して聞かせた。——とはいえ彼らには、トミー・ブロックとミスタートッドの戦いの結末までは、見届けている余裕はなかったのだが。

おしまい

ポター作品リスト

Beatrix Potter作品の日本における著作権は消滅し、パブリックドメインに帰しています。
翻訳の底本はFREDERICK WARNE出版の The original and authorized edition です。

1. The Tale of Peter Rabbit (1902) 【[ピーターラビットの話](#) : 2012.3】
2. The Tale of Squirrel Nutkin (1903) 【[リスのナトキンの話](#) : 2012.3】
3. The Tailor of Gloucester (1903) 【[グロスターの仕立屋](#) : 2012.4】
4. The Tale of Benjamin Bunny (1904) 【[ベンジャミンバニーの話](#) : 2012.3】
5. The Tale of Two Bad Mice (1904) 【[二匹のいたずらねずみの話](#) : 2012.12】
6. The Tale of Mrs. Tiggly-Winkle (1905) 【[ティギーウィンクルさんの話](#) : 2012.5】
7. The Tale of the Pie and the Patty-Pan (1905) 【パイと焼き型の話 : 執筆中】
8. The Tale of Mr. Jeremy Fisher (1906) 【[ジェレミー・フィッシャー氏の話](#) : 2014.2】 **NEW**
9. The Story of A Fierce Bad Rabbit (1906) 【[あらくれやくざうさぎ物語](#) : 2012.12】
10. The Story of Miss Moppet (1906) 【[モペット嬢物語](#) : 2012.12】
11. The Tale of Tom Kitten (1907) 【子ねこのトムの話 : 執筆中】
12. The Tale of Jemima Puddle-Duck (1908)
13. The Tale of Samuel Whiskers or, The Roly-Poly Pudding (1908)
【[サミュエル・ウィスカーズの話](#) もしくは、[うずまきプディング](#) : 2013.4】
14. The Tale of the Flopsy Bunnies (1909) 【[フロプシーのちびっこたちの話](#) : 2012.4】
15. The Tale of Ginger and Pickles (1909) 【[ジンジャーとピクルズの話](#) : 2013.1】
16. The Tale of Mrs. Tittlemouse (1910)
17. The Tale of Timmy Tiptoes (1911)
18. The Tale of Mr. Tod (1912) 【[ミスタートッドの話](#) : 2012.11】
19. The Tale of Pigling Bland (1913) 【[ピグリブランドの話](#) : 2013.12】
20. Appley Daply's Nursery Rhymes (1917) 【[アプリー・ダプリーの童謡](#) : 2012.4】
21. The Tale of Johnny Town-Mouse (1918)
22. Cecily Parsley's Nursery Rhymes (1922) 【[セシリ・パセリの童謡](#) : 2012.4】
23. The Tale of Little Pig Robinson (1930) 【[こぶたのロビンソンの話](#) : 執筆中】 **NEW**

原文参照

[Project Gutenberg : Books by Potter, Beatrix](#)

[Arthur's Classic Novels / Beatrix Potter](#)

ミスタートッドの話

<http://p.booklog.jp/book/48637>

作者：ピアトリクス・ポター

訳者：橘 柑子

作者プロフィール：<http://ja.wikipedia.org/wiki/ピアトリクス・ポター>

訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokijikudou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48637>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48637>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.